

ユウくん、一緒に歩こう！

阿部直俊

はじめに

この報告は、私が2014年度まで勤務していた特別支援学校（高等部）重複障害学級（以下、「重度重複学級」と表記）での実践である。ここでは、学級の一員であるユウくん（当時高等部3年生）の姿に焦点をあて、学級ぐみで授業づくりに取り組んだ1年間の経過をまとめた。

ユウくん（仮名）は、その激しい行動ゆえに「強度行動障害」と言われることが多かった。もともと障害名でも診断名でもないこの言葉は、「行動問題」の頻度や激しさが著しい状態として学校や施設での「処遇困難」を強く印象づける。そのため、ユウくんには「行動問題」への様々な対処法が試みられてきたが、一方で特定の行動に眼を奪われ、背景にある本人の内面や発達の様子を見えにくくしているようにも思えた。

本人の「生活、発達、障害」の全体をふまえて実践に取り組むこと、ユウくんが地域のなかで適切な支援を受け生活の場を拓いていくことが、私たちの実践の大切な目標になった。

1 ユウくんとの出会い

高等部3年生になったばかりのユウくん。背が高く、体重も90kgを超え

る堂々たる体格だ。顔が変形するほどの顎・頬叩きが続く、せわしく動きまわりながら身近にある物を指先でつまむと、パタパタと振り、口に触れ、投げる。「ウェー」という大きな声を響かせ、分厚い手をバシンバシンと打ち鳴らす。機嫌が良い時は、体を揺らして思い切り窓ガラスを叩くため、強化ガラスが音をたてながらグンとしなるのがわかった。

給食を手づかみで食べたり手に持った食器を投げたりしてしまうこともあるユウくん。言葉による理解や表出が困難なこと、目的意識をもって動くというより、クルクルと回りながらリズムカルに手を打つ動作を繰り返す様子などから、重い知的障害や自閉性障害があり、発達の姿としては、「1歳半のふし」の前段階にいる青年だと考えられた。

保育士や保護者からの聴き取りによれば、3歳ぐらいまでに5語程度の発語が見られたが、その後消失。多動傾向が強く、水をバシャバシャと手ではじいて遊ぶことが好きで、他の遊びにはなかなか広がらなかったという。自傷行為については、小学部高学年から中学部にかけて激しくなり、高等部では顎や頬が腫れ上がるほど強まっていた。

私は、ユウくんを含む5人の男子がいる重度重複学級（高3年）の担当になった。この学級の担任は毎年のように替わっている。私は、病休代替のリノ先生、臨時講師のフミヤ先生と共に学級づくりに取り組むことになった。

学級の5人はそれぞれに鋭敏な感覚をもち、言葉によるやりとりは1名を除いて難しい。食事や排泄面などにも生活上の困難が見られた。とりわけユウくんは、頭突き等によって人にケガをさせたり、たたき割った窓ガラスで負傷し救急車で搬送されたりする「派手な問題行動」を繰り返していた。これまでも興奮状態で仲間や教師にケガをさせてしまったことから、ますます特定の教師の個別対応に終始しがちでもあった。

また、ユウくんは福祉の生活支援を長年にわたりほとんど利用できていなかった。17年間365日を家族が支える生活。「施設ではできない」と断られた支援をすべて両親が行う生活は、いつ限界を迎えてもおかしくないと思われた。

学級では、保護者とできる限り連絡・相談・情報交換の機会をもつこと、